芸術研究15　―玉川大学芸術学部研究紀要―　2023　pp. 47～56
STUDIES IN ART 15　―Bulletin of Tamagawa University, College of Arts―　2023

［研究ノート］

音楽鑑賞教育に求められる文化的・歴史的背景への視点
―ヨーデルを事例とした考察―

Perspectives on the Cultural and Historical Background Necessary for Music Appreciation Education
―A Case Study of Yodeling―

小林史子

KOBAYASHI Fumiko

〈抄　　録〉

現在、中学校及び高等学校における音楽教育の目標には、音楽文化と豊かに、幅広く関わることが掲げられている。この目標に向けては、音楽文化についての理解が必要であり、音楽をその背景となる文化・歴史と関連付けて鑑賞したりする活動が重要になる。そこで、本研究では、ヨーデルを事例として、音楽の背景となる文化や歴史への視点をもとに、時代や様式が異なる複数の音楽を関わらせることで、音楽文化についての理解が深まることを明らかにする。

音楽文化としてヨーデルを認識し、文化的・歴史的背景への視点から理解することで、楽曲の新しい聴き方が可能になる。そして、こうした学びは、音楽文化についての概念的な理解を導く。

キーワード：音楽鑑賞教育、文化的・歴史的背景、ヨーデル

Abstract

Currently, the goal of music education in junior and senior secondary schools is to engage richly and extensively with music culture. To achieve this goal, an understanding of musical culture is necessary, and activities such as appreciating music in relation to its cultural and historical background is important. Therefore, using yodeling as a case study, we clarify that an understanding of musical culture can be deepened by engaging with multiple types of music from various periods and styles based on a perspective on the culture and history behind the music.

Recognizing yodeling as a musical culture from the perspective of their cultural and historical background enables a new way of listening to the music. These studies, then, lead to a conceptual understanding of musical culture.

Keywords: Music appreciation education, Cultural and historical background, Yodeling

所属：玉川大学芸術学部芸術教育学科
受領日　2023年9月30日

はじめに

音楽教育の目標は、時代の変化を反映しながら、様々な側面から語られる。現在の音楽科及び芸術科音楽の目標には、豊かな情操を培うという従来の事項とともに、音楽文化と豊かに、幅広く関わることが挙げられている[1)]。この事項は、本来、音楽科の重要なねらいであったが、中学校学習指導要領においては、平成20（2008）年の改訂で、教科の目標として「音楽文化に親しむ」という文言で新たに規定され、明確に示された。この背景には、国際化が進展する中、「我が国の音楽文化に愛着をもつとともに、諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成」[2)] が重視されたことがある。これに伴い、音楽文化の理解につながる学習として、音楽をその背景となる文化・歴史と関連付けて鑑賞したりする活動が挙げられている。音楽鑑賞教育においては、音楽の専門的な知識を用いて「音楽を形づくっている要素」を捉えることのみならず、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史との関わりについての理解することが重要となるのである。

しかし、ひとつの楽曲について、その背景となる文化や歴史を理解した上で鑑賞することが、即、音楽文化の理解につながるかというと、その程度は、限定的である。とりわけ、諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成するためには、複数の楽曲を比較したり、時代や様式が異なる分野の音楽を関連付けたりすることによって視野を広げ、俯瞰的に考えることが必要になる。そこで、本研究では、世界各地で様々に受容され、変化を遂げてきたヨーデルを事例として、音楽の背景となる文化や歴史への視点をもとに、時代や様式が異なる複数の音楽を関わらせることで、音楽文化の理解が深まることを明らかにする。

本研究で事例とするヨーデルは、現在の日本においては、その音楽的な特徴や受容の歴史から、諸外国の音楽ではあるものの、いわゆる民族音楽には当てはまらず、どちらかといえば大衆音楽の一種と見なされる傾向にあると考えられる。もっとも、民族音楽という発想が、西洋において非西洋の音楽を対象に用いられたことに基づけば、ヨーデルは、民族音楽ではないといえる。また、ヨーデルが伝承されてきた地域は、民族的なまとまりよりも、村落ごとの集団意識が強い。現在の国に当てはめると、スイス、オーストリア、ドイツの3カ国に広がっているが、いずれの国においても、全域で伝承されているわけではない。しかし、スイスでは、ヨーデルの歌唱を生活の中から生まれた伝統的な歌唱法として捉えて積極的に伝承し、ルツェルン応用科学芸術大学の民俗音楽学科には、2018年にヨーデル専攻コースが設置された[3)]。一方で、オーストリアやドイツのヨーデルは、商業的な発展を遂げ、アメリカに波及して他の様式と融合し、新しいジャンルとして認識されるようになった。文化的・歴史的背景についての理解を深めた上で、ヨーデルを鑑賞するとき、音楽文化に対する認識は、どのように深まるのだろうか。

1　ヨーデルとは

ヨーデルは、いわゆる地声（胸声）と裏声（頭声）を交互に組み合わせた歌唱法を伴う、ヨーロッパのアルプス地方の民謡を指す言葉である。楽曲のすべての部分がこの歌唱法で歌われるわけではないため、この歌唱法を用いる部分のみを指して、ヨーデルという場合もある。同様の歌唱法は、アフリカのピグミーやメラネシアの部族、日本では青森県の民謡「ホーハイ節」や奄美諸島の民謡にも見られるが、本稿では、ヨーロッパのアルプス地方の民謡を指す言葉として用いる。

ヨーデルにおいて、いわゆる地声（胸声）と裏声（頭声）を交互に組み合わせて歌う部分には、特定の歌詞がなく、低音は「オ」や「ア」、高音は「イ」の母音と中心として、「エ」や「ウ」の母音や「h」「j」

「l」を中心とした子音の装飾をもって歌われる。一方で、歌詞を伴う部分は、発声の切り替えはなく、郷土の讃美、山の自然や愉しみなどが歌われる。

ヨーデルという名称は、1050年頃から1350年頃の古いドイツ語である中高ドイツ語の“jolen”に由来し、1796年、エマヌエル・シカネーダーが作曲した“Der Tyroler Wastl”の中で、はじめて正式に使われたという[4)]。しかし、ヨーデルの正確な起源は不明であり、地域や時代によって様々に普及、発展したため、幅広い曲想の楽曲に対しヨーデルという言葉が用いられる。そこで、本章では、ヨーデルについて、その起源と種類、音楽的な特徴、スイスにおける伝承の特徴についてまとめる。

1.1　ヨーデルの起源と種類

ヨーデルの起源には諸説あるが、まずは、アルプス高地の牧童が歌っていた歌との関わりが指摘できる。例えば、「クーライエン」と呼ばれる、牛集め（牛追い）のために歌われた歌には、ヨーデル風の歌い方が残っており、深いつながりが感じられる。

ヨーデル研究の第一人者といわれるヘルムート・ポメル（Helmuth Pommer, 1883–1967）によれば、ヨーデル風の歌い方として最も単純なものは、「ユッヘツェル」と呼ばれる叫び声で、単独で歌われる。人里から隔てられた高地での生活における叫び声は、宗教的な呪術、あるいは、離れた場所にいる仲間への伝達に端を発すると考えられている。のちに、「ユッヘツェル」が2つの声部で歌われるようになったものが「ルーフェ」で、中世後期には、複数声部によるヨーデル的な歌唱が行われていたという。各地の農村や牧童小屋に何百種類ものヨーデル的な歌唱があり、16世紀中期に、これらを収集した歌集が出版されている。さらに、18世紀の後半には、人が集まる村落や市場にもヨーデル的な歌唱が伝わり、グループで歌われ、音楽的に整えられた。ヨーデルが重唱として和声を伴うようになったのは、オーストリアのシュタイアーマルク地方であると考えられており、その根拠は、当地が早くから和声的な讃美歌を歌っていた事実である。また、チロル地方も含め、オーストリアのヨーデルは、民謡のリフレインとして楽曲に添えられて伝承されている。これらの地域と同様に、アルプスの高地を利用して農牧を行うドイツのバイエルン地方でもヨーデルが伝承されているが、現在のバイエルンで聞かれるものは、技巧的で商業的な傾向が強いといわれる[5)]。

現在、ヨーロッパのアルプス地方でヨーデルが歌われているのは、主にドイツ語圏である。中でもスイスは、古いヨーデルの特徴を最もよく保持している。スイスでは、最高音域の声から一息で音程を下げながら叫ぶ甲高い歓声は、「ユヒツァー」（Juchzer）または「ユッツ」（Jutz/歓呼）としてヨーデルとは区別されている。さらに、歌詞のない旋律で歌うヨーデルと、歌詞を伴った民謡にリフレインとしてヨーデルが添えられているものを区別し、前者は自然ヨーデル、後者はヨーデルリートとみなす[6)]。自然ヨーデルは即興的に歌われ、多声の場合には、独唱者に続いて他の声部が加わって歌う。オーストリアやドイツのヨーデルリートにおいても、ヨーデルの部分では、個人の技能に合わせて、自由な装飾を加えて歌う様子が見受けられる[7)]。

また、ヨーデルの歌唱は、アメリカのカントリー・ウエスタンの音楽に取り入れられ、人々を楽しませる音楽として、広く親しまれている[8)]。

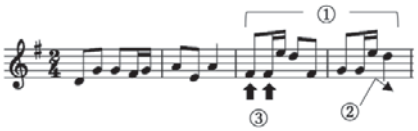
1.2　音楽的な特徴

ヨーデルの音楽的な特徴は、まず、いわゆる地声（胸声）と裏声（頭声）を交互に組み合わせた歌唱法に因る。すなわち、頻繁に大きく変化する声の音色が最大の特徴である。そして、いわゆる地声（胸声）は低音、裏声（頭声）は高音で歌われるため、旋律は大きく跳躍する。ヨーデルの楽曲は基本的に長調であり、旋律は和声進行を形づくるように、6度やオクターブの跳躍、分散和音を軸として、

半音や全音の装飾を加えて歌われる（【譜例1】【譜例2】の①）。

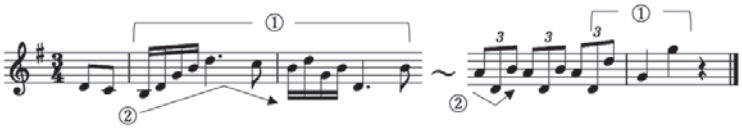
また、分散和音や跳躍の後に旋律線が逆方向に動き、山型や谷型（【譜例1】【譜例2】の②など）を示すことが多い。低音や分散和音の最低音では、同音を連続して繰り返したり（【譜例1】の③など）、半音で行き来したりする動きがよく見られる。いわゆる地声（胸声）になる部分を強調することで、裏声（頭声）の部分との対比が鮮やかになっている。

【譜例1】



＊《ホルディリディア》より、筆者作譜

【譜例2】



＊《ヨハン大公のヨーデル》より、筆者作譜

スイスの牛集めの歌など、古くから伝わるヨーデル的な歌唱には、長調の音階から4分の1程度低い音も用いられるが、ヨーデルリートや商業的に発展したヨーデルでは、正確な音程で分散和音や音階を歌うことが求められる。また、発声の切り替えをより素早く繰り返し、高度な技巧として即興的な動きで歌われることで、ヴィルトゥオーゾの演奏を堪能できるジャンルとなっている[9)]。

1.3　スイスの連邦ヨーデル祭

上記のように、ヨーデルは、技巧的な歌唱法として捉えることができる。しかし、スイスでは、ヨーデルをアルプス高地における文化と切り離すことなく、伝承している。現在では、1910年から3年に1度、連邦ヨーデル協会が開催しているヨーデル祭が、その役割の一端を担っているといえるだろう。この祭では、ヨーデルの歌唱のほか、伝統楽器であるアルプホルンの演奏や旗回しが行われる。アルプホルンと旗回しは、どちらも、牧童同志の連絡手段であったと考えられており、ヨーデルも同様に、連絡手段として牧童の生活に密着したものであったことが意識されているのである。

スイスでは、各地に地元住民を構成員とするヨーデルのコーラスグループがあり、ヨーデル祭では、コンテスト形式でその歌唱が披露される。コンテストでの歌唱が許されるのは、連邦ヨーデル協会の会員のみで、また、会員の資格が得られるのは、会則によって、スイス人とスイスに住む外国人、例外としてスイスの国境近くに住む外国人に限られている。この会則は、純粋のスイスのヨーデルを受け継いでいくために必要だと考えられている[10)]。コンテストの参加者は、民族衣装を身に付け、歌唱中には、ポケットに手を入れていなければならないというルールを守り続けている。身振り手振りによる表現に頼らずに、歌声だけで表現するためのルールであり、華やかなパフォーマンスよりも、伝統的な歌声を重視しようという姿勢が明確である。

2　日本におけるヨーデルの受容

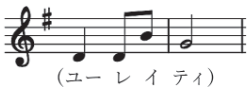
日本でヨーロッパ各国の民謡が広く知られるようになったのは、明治5年に制定の学制における科目として「唱歌」が位置付けられ、諸外国の民謡に日本語の歌詞を付けて歌うようになったことに端を発する。しかし、ヨーデルが知られるようになるのは後のことで、いわゆる歌謡曲の中で聴かれたのがきっかけである。その後、ヨーデルは様々な場面で歌われ、鑑賞されるようになった。

そこで、本章では、日本におけるヨーデルの受容について確認し、ヨーデルを通して音楽文化に親しむために必要な視点について考察する。

2.1　娯楽やレクリエーションの楽曲として

日本において、ヨーデルが広く受容された最初の時期は、1934（昭和9）年である。この年にレコードが発売された《山の人気者》は、日本におけるヨーデルの定番として認識されており、特に、「ユーレイティ」と歌われるヨーデル風の歌唱部分（【譜例3】）は、幅広い世代にとって、どこかで耳にしたことがあるフレーズであると思われる。しかし、この楽曲は、アルプス地方の民謡ではなく、イギリスで活躍したエンターテイナーであるレスリー・サロニーが1930年に発表し、世界的に広まったものである[11)]。したがって、《山の人気者》は、ヨーデル風の歌唱部分を備えているものの、その性格は、一般大衆を対象とした歌謡曲である。

【譜例3】



＊筆者作譜

その後、ヨーデル風の歌唱部分をもつ民謡として広く受容されていた楽曲としては、スイス民謡の《おおブレネリ》が挙げられる。日本には、1949（昭和24）年頃、YMCA（Young Men's Christian Association）のレクリエーション指導を通してアメリカから伝わった[12)]。原曲はヨーデル部分をもつスイスの民謡だが、民謡として聴き味わう目的よりも、青年活動のレクリエーションに用いる歌として受容されたといえる。このほか、日本でヨーデルの定番とみなされてきた楽曲は、登山など、山岳地帯における活動に伴って受容された側面があると考えられる。日本人の歌手や仲間内の演奏ではなく、本場のヨーデルを聴きたいという需要も生まれ、ヨーロッパのアルプス地域で録音された音源が、LPレコードとなり、発売されている[13)]。

こうしたレコードに収められた楽曲のうち、オーストリア民謡《ヨハン大公のヨーデル》は、特に人気が高い曲であったという。この楽曲に歌われているヨハン大公とは、ヨハン・バプティスト・フォン・エスターライヒ（Johann Baptist von Österreich,1782–1856）という人物のことで、フランツ二世の弟にあたる。1782年に生まれた貴族でありながら、貴族社会よりも山岳を好み、シュタイアーマルク地域の興隆に尽力したことで、民衆に慕われた人物である。《ヨハン大公のヨーデル》は、彼の死後、民衆の間で彼を悼んで歌い出され、現地で歌い継がれてきた[14)]。

2.2　児童合唱のレパートリとして

1963年12月、NHK『みんなのうた』で、西六郷少年少女合唱団が歌う《アルプスの谷間》が放送された。この楽曲は、ヨーデル部分をもったスイスの民謡で、《美しきエンメンタール》の曲名でも知られている。NHK『みんなのうた』では、1965年に《山男のヨーデル》も放送しており、《アルプスの谷間》と同様に、西六郷少年少女合唱団が歌っている。1984年のNHK全国学校音楽コンクールで《山男のヨーデル》（委嘱編曲版）を自由曲として歌った台東区立金竜小学校が全国最優秀賞を受賞したこともあり、この楽曲をはじめとする、ヨーデル部分を特徴とした民謡は、小学校における愛唱歌や、児童合唱のレパートリとして受容されていった。

金竜小学校の指導者であった川上彌榮子は、かねてよりヨーデルに深い興味をもっており、1960年代に高等学校で教鞭を執っていた際には、高校生と一緒に《ホルディリディア》を歌っていたという。小学校でヨーデルを歌うことになったきっかけは、スイス・ケレンザー少年少女合唱団の来日演奏会で聴いた「短い曲の中に時々おりこむヨーデル歌い」に、「さほど構えて歌う必要はない、楽しみに歌う程度でも良いのだ！」と感じたことにあったと振り返っている[15)]。

2.3　世界の諸民族の音楽として

中学校学習指導要領では、昭和22（1947）年に作成された試案の段階から、各国の民謡を扱うことが示されている。しかし、鑑賞教材としての扱いは、常に任意であり、必須で扱う楽曲やジャンル

が指定されていたことはない[16]。このような中にあって、ヨーデルは、独特な発声法で歌われる民謡として、教科用図書に掲載されてきた。1974年の初回放映から100回以上再放送されているアニメ『アルプスの少女ハイジ』のオープニング曲に、スイスで録音されたヨーデルの音源が使用されており、生徒にとって、ヨーデルが親しみやすいものであったこと、また、第1節及び第2節で確認した経緯から、教師もヨーデルを知っていたことなども、ヨーデルが掲載された理由として考えられる。

近年の教科用図書でのヨーデルの扱いは、世界の諸民族の音楽における多様な声の音色のひとつとして、モンゴルのオルティンドーなどと比較して鑑賞することが意図されている。かつては中学校の教科用図書に掲載されていたが、現在は、小学校と高等学校の教科用図書に掲載されている。現行の高等学校の教科用図書では、鑑賞活動の中に表現活動も取り入れることを意図して、写真と短い解説とともに、《美しきエンメンタール》の楽譜が掲載されている[17]。

2.4　音楽文化と豊かに関わるために

このように、ヨーデルは、日本において幅広く受容され、親しまれている。しかし、その実情は、歌謡曲やレクリエーションの楽曲としての受容が主であり、ヨーデルが、深い理解をもって鑑賞する意義がある音楽だとは見做されてこなかったともいえる。また、音楽科の授業でも、声の音色のみに注目して他の民族音楽と比較するだけでは、歌唱における発声の多様性に気付くことはできても、音楽文化の理解を深めることには至らない。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　音楽編』には、次のような解説がある。

> 音楽文化と豊かに関わることができるようになるためには、音楽科の学習において、音楽文化についての理解を深めていくことが大切になる。また、グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできるようになることも大切である。これらのことは、自己及び日本人としてのアイデンティティーを確立することや、自分とは異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切にし、多様性を理解することにつながる。（p.12）

音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、音楽文化と豊かに関わるためには、あらためて、ヨーデルの文化的・歴史的背景に目を向けた鑑賞教育が必要である。

3　文化的・歴史的背景への視点

本章では、ヨーデルの文化的・歴史的背景についての理解を深めた上で、時代や様式が異なる複数の音楽を関わらせた鑑賞の学習活動を展開することで、音楽文化についての理解が深まることについて述べる。音楽文化とは、その場で鳴り響く音や音楽だけではなく、社会の変化や文化の発展とともに様々な音楽が誕生し、形を変えながら受け継がれたり、形を変えずに伝承しようという意識を生み出したりするという状況の総体であるといえる。こうした概念的な理解を深めるためには、文化的・歴史的背景の視点から、音楽の特徴を捉えることが有効である。

3.1　文化的背景への視点

本研究では、第1章でヨーデルの起源を高地での放牧という生活様式に求め、その歌唱法が長い時

間を経て人々の暮らしの中で発展し、技巧的な表現として普及したという側面を捉えた。一方、スイスにおいては、技巧的な歌唱法としてではなく、自国の文化としてヨーデルが位置付けられていることも確認した。鑑賞教育においては、こうした文化的背景を理解した上で、アルプス高地の牧童の歌に始まり、自然ヨーデルとヨーデルリート、スイスの連邦ヨーデル祭での演奏、さらに、レコードやテレビで人気を博した楽曲やレクリエーションでの愛唱歌などを聴き比べることで、ヨーデルを用いた多様な表現を味わい、ヨーデルに対する理解を深めることができる。

また、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　音楽編』には、「現在も、社会の変化や文化の発展とともに様々な音楽が誕生していることに目を向けることが、音楽の捉え方を広げ、日常生活の中で親しんでいる音楽も含めて、音楽を文化として捉え、音楽文化について考えることにつながっていく。」とある（p.88）。ヨーデルは、社会の変化や文化の発展とともに、様々な形で人々の暮らしとともに育まれてきた音楽文化であり、牧童の生活様式や、時代や地域の違いによる音楽の変化などの視点からヨーデルについて俯瞰すると、ヨーデルが、様々な文化的背景を包摂することによって発展し、広く親しまれていることが捉えられる。

3.2　歴史的背景への視点

音楽文化についての理解を深めるためには、歴史的背景の視点からの考察も有効である。例えば、伝統的な表現が重視されているスイスに対して、オーストリアやドイツで、ヨーデルリートの形式や商業的な音楽としてのヨーデルが発展した背景には、地理的な状況とともに、歴史的な事情も関わってくる。

ドイツでは、早くも19世紀初頭に、劇場の余興にヨーデル歌手が盛んに出演していたという。プロイセンとオーストリアがドイツ語圏における2大勢力となり、宮廷文化が発展した後、フランス革命の影響から市民階級が台頭していく時代である。ヨーデルという名称をはじめて正式に使ったといわれているエマヌエル・シカネーダーが、この時代の劇場に関わる興行師であったことからわかるように、この頃のドイツにおいてヨーデルは、すでに興行の中で扱われる音楽となっていたのである。

また、1828年にゲーテが書いた手紙には、「チロルの人たちがまたやってきた。あの歌をまた歌ってもらおう。私の大好きなヨーデルは戸外で、広い場所で真価が発揮されるのだけれども」とあることがわかっている[18]。オーストリアの山岳地帯であるチロル地方では、1809年から1815年までの間、ウィーンを目指すナポレオン軍との激しい戦闘が断続的に続いていた。それ以前にも、巡業歌手として各地を旅する者は存在したと考えられるが、戦闘によって衰弱したチロル地方の人々が、ドイツ各地に移動し、ヨーデルを歌うという状況が続いていたと推測できる。

一方、ウィーンでは、ナポレオン軍侵攻の余波ののち、1815年以降には一定の平和と繁栄が見られたものの、その政治体制は、自由主義者に対しての抑圧が強いものであった。当時のウィーンの生活様式を言い表した「ビーダーマイヤー」は、圧政から目を逸らして生活する態度であるともいわれ、人々の目がアルプスの美しい自然に向けられていった時代でもあった。ウィーンにおいては、ヨーデルは興行的な音楽であるとともに、アルプスを想起させ、自然への憧憬を感じる音楽として受け入れられていたのであろう。そのような背景から、《ヨハン大公のヨーデル》のような楽曲が生まれたと考えられる。

スイスは、フランス革命とナポレオン軍の侵攻において、ドイツやオーストリアとは大きく異なる状況[19]にあった。その後も、険しい山岳地帯が多いという自然環境などから、興行的な音楽よりも地域に根ざした音楽を重視する傾向が強まったと考えることができる。

3.3　音楽文化の概念的な理解

前節までに示したように、音楽鑑賞教育では、文化的・歴史的背景の視点から複数の音楽を比較することによって、それぞれの音楽のよさをより深く味わうことができるようになり、こうした学びの蓄積が、音楽文化を概念的に理解することにつながる。そして、音楽を文化として捉え、文化的・歴史的背景も含めて鑑賞するという、新しい聴き方が可能になるのである。

もっとも、文化的背景や歴史的背景に目を向ける際には、対象者の発達段階によって、扱う内容の程度に配慮が必要である。音楽を形づくっている要素の特徴のみに着目した方が、楽しんで鑑賞できる場合もあろう。しかし、音楽文化と豊かに、幅広くに関わるためには、文化的背景や歴史的背景に目を向け、音楽文化を概念的に理解することが必要である。

現在、学習指導要領解説では、中学校の段階で、「音楽の特徴を理解できるようにするとともに、音楽が、人々の暮らしとともに育まれてきた文化であることなどを、生徒が自ら捉えることができるようにすることが大切である」ことが記されている（p.89）。「音楽が、人々の暮らしとともに育まれてきた」ことには、社会の変化や文化の発展とともに様々な音楽が誕生したことのみならず、本研究におけるヨーデルの例で示したように、従前の音楽が形を変えながら受け継がれたり、形を変えずに伝承しようという意識が生まれたりする状況も含まれる。こうした先人の創意工夫や、その先にある今日の日常生活の中で親しんでいる音楽の様相などの総体を、音楽文化として捉えることが肝要である。

おわりに

様々な音楽について文化的・歴史的背景を紐解けば、音楽文化とは、人々の生活の中で親しまれたものが、時代とともに様々に形を変えながら、発展していくものであることが理解できる。そして、その伝承の中で形を変えずに残ってきたものは、私たちに多くの気付きを与えてくれる。本研究で示したとおり、ヨーデルが様々に形を変えながらも、それぞれの土地で伝承されてきたことは、それぞれの楽曲をより深く聴き味わう手掛かりになるのである。

また、文化的・歴史的背景への視点をもち、時代や地域、ジャンルの異なる音楽を参照しながら鑑賞することで、音楽文化とはどのようなものか、概念的な理解が可能になり、私たちは、音楽文化と豊かに、幅広く関わることができるようになる。ヨーデルを鑑賞するにあたっては、関連が深い「牛集めの歌」や自然な状況で録音された歌、自然の景観、アルプホルンの演奏や旗振りの演技、そして、技巧を味わう演奏をはじめとする今日的に親しまれている様々なヨーデルを合わせて鑑賞することが、音楽文化の理解に役立つであろう。

音楽鑑賞教育では、楽曲の音楽的な知覚・感受とともに、文化的・歴史的背景への視点からの鑑賞が重要になる。音楽文化について概念的に理解する学習活動を積極的に取り入れていけるよう、日頃から様々な音楽の背景を深く知る姿勢をもち、比較鑑賞に適した楽曲を幅広く求め、さらなる教材研究を進めていくことが、今後の課題である。

注

1）中学校学習指導要領では「豊かに」、高等学校学習指導要領では「幅広く」となっている。
2）文部科学省『中学校学習指導要領解説』（2008）p.12より引用。
3）スイス公共放送協会オンラインサイト（2018）による。

4）スイス公共放送協会オンラインサイト（2006）による。
5）ヘルムート・ポメルの著書の内容は、江波戸（1981）pp.39−43を参照した。
6）江波戸（1981）のほか、スイス公共放送協会オンラインサイト（2006）、渡辺（1960）に同様の説明がある。
7）カントリー・ウエスタンとヨーデルが融合した楽曲である《She Taught Me How to Yodel》は、近年でも、ウクライナの少女（Sofia Shkidchenko）がテレビのタレントオーディションで歌った動画が広まっている。本人のチャンネル（https://youtube/CHspo7fphCI?feature=shared）のほか、日本語訳を付けた紹介動画なども散見される。
8）例えば、YouTubeで《ヨハン大公のヨーデル》を検索すると、3人のヨーデル歌手（Angela Wiedl, Melanie Oesch, Herlinde Lindner）がそれぞれの装飾で同じ楽曲を歌う様子を試聴することができる（https://youtube/hVjNxV7qM90?feature=shared）。こうした例から、ヨーデルリートでは、ヨーデルがカデンツァ的に歌われているといえる。
9）例えば、ドイツのフランツル・ラング（1930−2005）は、素早い動きのヨーデルを自在に歌い、「ヨーデル王」とも呼ばれ、多くの録音を残している。
10）スイス公共放送協会オンラインサイト（2005）による。
11）「世界の民謡・童謡」研究会のWebサイト『世界の民謡・童謡』に掲載されている記事による。
12）江波戸（1992）pp.88−89の記述による。
13）『音楽の友』（1959年7月号）の記事「キャンプの手帖　ヨーデルの魅力　ヨーデルのレコード」で、8枚のLPレコードが紹介されている。
14）江波戸（1992）p.86の記述による。
15）『教育音楽』（1996年4月号）の記事「川上彌榮子の「合唱指導」ここが決めどころ」による。
16）西洋クラシックの作品や、我が国の伝統音楽については、「共通教材」として必ず扱う楽曲が定められていた時期がある。
17）教育芸術社の高等学校教科用図書『MOUSA 1』p.99に掲載されている。
18）『音楽の友』（1960年9月号）の記事「アルプスのヨーデル」の記述による。
19）1978年には、フランス共和国軍がスイスに侵攻し、ヘルヴェティア共和国の樹立によって、スイスはフランスとの同盟関係を余儀なくされている。

参考文献

江波戸昭『民衆のいる音楽　太鼓と合唱』、晶文社、1981年。
江波戸昭「スイスのヨーデル祭」『季刊民族学』、第20号、1982年、52頁−58頁。
江波戸昭『世界の民謡めぐり』、日本書籍、1992年。
小原光一ほか『MOUSA 1』、教育芸術社、2022年。
川上彌榮子「川上彌榮子の「合唱指導」ここが決めどころ」『教育音楽　4月号』、音楽之友社、1996年、80頁−81頁。
ザン、ユーゴー『スイス、ムオタタールのヨーデル「ユーツリ」』、キングインターナショナル、1992年。
ジェラヴィッチ、バーバラ（矢田俊隆訳）『オーストリアの歴史と文化』、山川出版社、1994年。
スイス公共放送協会オンラインサイト「Swissinfo.ch」、https://www.swissinfo.ch/jpn/スイス―ヨーデルフェスティバル/4565232、2005年。（最終閲覧日：2023年9月30日）
スイス公共放送協会オンラインサイト「Swissinfo.ch」、https://www.swissinfo.ch/jpn/ヨーデル/7690194、2006年。（最終閲覧日：2023年9月30日）

スイス公共放送協会オンラインサイト「Swissinfo.ch」、https://www.swissinfo.ch/jpn/culture/スイスの伝統音楽_アルプスのヨーデルを高等教育で―新たな試みに賛否両論/44610286、2018年。（最終閲覧日：2023年9月30日）

「世界の民謡・童謡」研究会「山の人気者」『世界の民謡・童謡』、http:/ /www.worldfolksong.com/songbook/swiss/alpine-milkman.html。（最終閲覧日：2023年12月20日）

日本放送協会「みんなのうた　アルプスの谷間」、https://www.nhk.or.jp/minna/songs/MIN196312_01/。（最終閲覧日：2023年9月30日）

日本放送協会「みんなのうた　山男のヨーデル」、https://www.nhk.or.jp/minna/songs/MIN196508_07/。（最終閲覧日：2023年9月30日）

文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編　平成20年9月』、教育芸術社、2008年。

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』、教育芸術社、2018年。

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術（音楽　美術　工芸　書道）編』、教育図書、2019年。

山之内克子『物語　オーストリアの歴史』、中央公論新社、2019年。

リケット、リチャード（青山孝徳訳）『オーストリアの歴史』、成文社、1995年。

渡辺護「キャンプの手帖　ヨーデルの魅力　ヨーデルのレコード」『音楽の友　7月号』、音楽之友社、1959年、102頁−104頁。

渡辺護「アルプスのヨーデル」『音楽の友　9月号』、音楽之友社、1960年、100頁−101頁。

渡辺護『ウィーン音楽文化史（上）』、音楽之友社、1989年。

渡辺護『ウィーン音楽文化史（下）』、音楽之友社、1989年。

Schlagermusikgirl18 “Angela Wiedl,Melanie Oesch,Herlinde Lindner-Erzherzog Johann Jodler/Zillertaler Bravourjodler”, https://youtube/hVjNxV7qM90?feature=shared。（最終閲覧日：2023年12月20日）

Sofia Shkidchenko “Awesome Ukrainian yodeler ― SOFIA SHKIDCHENKO（with English subtitles)”, https://youtube/CHspo7fphCI?feature=shared。（最終閲覧日：2023年12月20日）